日本語・日本文化学類の国際交流

今井雅晴
人文社会科学研究科教授　日本語・日本文化学類長

1. 日本語日本文化の教育目標

日本語・日本文化学類は、世界に向けて日本文化を発信できる有能な人材の育成を目的として、日々、活動をしています。いうまでもなく現代は国際化の時代です。日本は世界中の国々から多くの恩恵を受けています。その恩恵がなければ日本は成り立っていきません。私たちもそれに対してお返しをすべく、努力しなければなりません。筑波大学の学生諸君もぜひこのような意欲的な意識を持っていただきたいものと思います。

日本語・日本文化学類では、日本語、日本語教育、日本文化、異文化理解を柱としたカリキュラムを組んでいます。学類には「日本語・日本文化学」という専攻しかありませんので、1学類1専攻という珍しい学類でもあります。本学類に入学した学生諸君は、日本語教育だけしか勉強しない、日本文化だけを集中的に勉強する、ということではありません。全部を、それぞれの分野の果たす役割を考えながら勉強するのです。

2.「日本語教育」をめざす

例えば、「日本語教育」をめざす学生諸君なら、「日本語」の語学的研究も勉強しなければなりません。それも、世界の諸言語のなかの日本語をです。また世界で日本語を学んでいる人たちのほとんどは（現在、250万人以上います）、日本語を学ぶことそのものに意義を見い出しているのではなく、日本語の習得を通じて、その背後にある日本の文化、政治、社会、経済を知ろうとしているのです。日本語教育者をめざす諸君は、広い意味での「日本文化」を深く学ばなければなりません。そして日本国内の各地にいけばわかるように、各地にはそれぞれの文化があります。茨城県へ来て、自分の出身地とはずいぶん違う、と驚く新入生も多いはずです。世界へ出れば驚く文化の

差はさらに大きくなります。でも、すべてが私たちと同じ人間が作っています。異文化に接することは、私たち自身の人間性を高めてくれます。私たちは異なる文化を理解すべく、柔軟な感覚を持たねばなりません。「異文化理解」は世界へ出ていくための準備の第一歩でもあります。

3. 日本文化に関心がある

他の分野に強い関心がある学類生諸君にしても、同じことです。「日本文化」は古来、日本列島という島国の中だけで成り立ってきたのではありません。アジアの、そして世界のなかで生まれ、育てられてきたのです。「異文化理解」の勉強は必須です。そして「日本語」は私たち自身が日本文化を理解し、他に伝える有効な手段です。「日本語」の特色も理解しておかねばなりません。例えば英語に対して日本語はどのような特色があるか、私たちは中学校で英語学習に接した時、それを身近に感じたはずです。

4. 太い幹に育つために

日本語・日本文化学類は以上の教育方針を持っています。日本語・日本文化学類に入学した諸君は、この目標をよく理解して勉強し、生活していかねばなりません。諸君は、いずれ日本と世界を背負う大木になるであろうと期待しているところです。そしてそのためには、学類生としている間に、日本語・日本文化学類の栄養をよく吸収し、太い幹を育てなければなりません。その太い幹があってこそ、豊かに葉が繁り、たわわに実がなるのです。それに対して私たち教員は援助を惜しみません。日本語・日本文化学類の教員は日本を、世界を舞台として第一線で活躍している者ばかりです。学類生諸君がそれを‘利用’しないのはもったいないと思います。

そして必要ならば他学類の授業を聴講させてもらうのもよいでしょう。ただ、日本語・日本文化学類に入学した意味を忘れ、外のあちらこちらに気持を移動させるならば、皆さんの幹は細くしか育たず、大木にはなれません。繰り返せば、太い幹があってこそ、豊かに葉が繁り、たわわに実がなるのです。

5. 日本語・日本文化学類の国際交流

日本語・日本文化学類では国際交流を盛んに推し進めています。それは教員が教育を進めていくうえで、国際交流は重要であると確信しているからです。そのために多くの留学生を受け入れています。毎年１学年の定員以上の人数の留学生がいます。まず、日本政府が推進している留学生である日本語・日本文化研修留学生（「日研生」といっています）十数名がいます。年度によっ

て異なりますが、アジア、ヨーロッパ、アメリカ、アフリカ、オセアニアなど、文字どおり世界各地から1年間、日本語・日本文化を学びに筑波大学に留学してきます。日本語・日本文化学類では学類の教員と学生がこぞって彼らを歓迎しています。日研生には1人1人、日本語・日本文化学類生がチューターとしてつき、勉強と生活の指導をします。日研生は1年後に修了論文を日本語で完成させなければなりませんが、そのための指導に学類生に加えて大学院生のチューターも1人1人つきます。

また他の、4年間の正規の課程を学ぶ留学生もいれば、半年の留学を経験する留学生もいます。いずれも担任の教員がついています。日本語・日本文化学類では、それらの留学生や日研生を招き、留学生歓迎の意味でのパーティを開きます。これは学類生の主催です。学類生諸君は熱心に準備をしてくれます。準備には留学生も参加します。昨年度は3回も行ないました。3回目は留学生歓迎バレーボール大会でした。私も参加したかったのですが、時間がとれずにたいへん残念でした。

また、留学生と学類生が共同で行なう演習の授業もあります。そこでは思いがけない話の展開になることもあります。

このような日本語・日本文化学類生の留学生への対応は、いうまでもなく留学生に

とって有益です。そして学類生にも大きな財産になることを強調したいと思います。留学生に対応するためには、相手をよく理解し、相手に親切にしてあげようという気持ちが必要です。それによって自然に異文化理解の能力が身につき、国際性が養われます。つまりは豊かな人間性が身につくはずです。大学卒業後、外国で活躍するにしても、国内で生きるにしても、この人間性は大きな財産です。

6. 識見を身につける

日本語・日本文化学類では、学類生諸君に日本語、日本語教育、日本文化、異文化理解についての単に知識だけを学んでもらおうというのではいうのではありません。学べる知識には限りがあります。私たち教員は、事にあたった時に対処できる、知識に裏打ちされた識見を育ててほしいと願っています。そして学類生諸君が新たな文化を生み出していくことを希望します。

(いまい　まさはる／日本文化史)